

ポスター | 1-07 カテーテル治療

## ポスター

## カテーテル治療⑤

座長:佐川 浩一 (福岡市立こども病院)

Sat. Jul 18, 2015 10:50 AM - 11:38 AM ポスター会場 (1F オリオン A+B)

III-P-031~III-P-038

所属正式名称: 佐川浩一(福岡市立こども病院 循環器科)

[III-P-037]新生児期に行った心臓カテーテル治療から見た胎児診断症例の  
検討

○石田 宗司, 石井 卓, 中本 祐樹, 吉敷 香菜子, 稲毛 章朗, 上田 知実, 嘉川 忠博, 朴 仁三 (榊原記念病院 小児循環器科)

Keywords:胎児診断, カテーテル治療, 動脈管依存性心疾患

【背景】胎児診断は分娩を計画的に行い、適切な時期での治療介入により児の予後を改善させる報告がある一方、予後に影響しないとの報告もある。今回、胎児診断の有用性を新生児期に行ったカテーテル治療(以下 CI)の側面から考察する。

【方法】2005年1月1日から2015年1月1日までの10年間に当院で新生児期に CIを行った75例(80回)が対象。胎児診断例(以下 A群、13例)と生後診断例(以下 B群、62例)に分けて検討する。

【結果】疾患の内訳は TGA30例、PA/IVS9例、vPS10例、HLHS7例、RV7例、TA3例、TAPVR2例、MA2例、SLV2例、IAA 1例、SRV1例、critical AS1例。CIは BAS55回、PTPV16回、PDA stent留置7回、TAPVR stent留置1回、PTAV1回(計80回)。生後診断例の契機はチアノーゼ52例、心雑音6例、呼吸障害3例、その他1例。平均在胎週数は A群37週6日、B群39週0日( $P=0.009$ )、平均出生体重は A群2627g、B群2993g ( $P=0.002$ )。搬送時の平均日齢は A群4.46日、B群4.24日( $P=0.903$ )。搬送時の血液ガス分析による pH,Lac,BE( $P=0.583,P=0.054,P=0.10$ )に優位差を認めなかった。搬送当日の緊急 CIは A群1例に対し、B群16例(うちショック症例4例で  $pH<7.0$ は2例)と多く認めた。しかし、CIの成功率(A群10/15 B群58/65  $P=0.071$ )、合併症の割合(A群3/15 B群5/65  $P=0.340$ )、両群の生存率( $P=0.099$ )に有意差を認めなかった。

【考察】胎児診断の有用性として動脈管依存性心疾患に対する LipPGE1投与や BASなどの緊急 CIが挙げられる。A、B群の搬送時の全身状態(pH,Lac,BE)に優位差を認めなかったが、生後診断例が出生施設から専門施設を經由し内科的治療介入が行われ搬送される当院の特性によるものと考えられる。そのような背景から今回 CIの側面から予後を検討したが、緊急 CI症例は B群に多く認めたが全体の症例数が少なく、統計学的考察はできなかった。また、CIの成功率、合併症、そして生存率に有意差を認めず、本検討では胎児診断の有用性は確認できなかった。